

スローフードからスローツーリズムへ

－ 郷土の観光に対しスペインから学ぶ －

杉山道雄・信岡誠治*

1. はじめにー目的と方法

日本各地でスローフードやスローツーリズムがすすめられている。岐阜地域におけるスローフードと地産地消の意義と役割について研究を進めて来た¹⁾。もとよりスローフードはイタリア北部のベラという小さな町から伝えられている事は良く知られている。その意味は地域産の質のよい食材を家族や友人と一緒に召し上がる食事で、地域の活性化に貢献し、地域の社会性を高める食品づくりであり、その味の教育を子供達も含め、広くすすめることである。

他方、スローツーリズムはスローフードを起源とするスローイズムの中で考察されるものである。その意味で、従来から、スローフードの四段階なる論考を提言してきた。それを要約すれば第一段階は地元食材での栄養素充足段階ーまず、人間生存のために栄養素は充足されなければならない。栄養が充足されたならば、第二段階では美味しさ追求段階といわれるもので地元産の新鮮で美味しいものを食する段階で旬産旬消と言ってよく、良い食材の追求である。第三段階は豊かさの追求で“ゆっくり ゆったり ゆたかに家族や友人と共に食事をする”ことである。豊かさ追求段階では食材のみならず、ナイフ、フオーク、食器、食卓などの食卓文化が大切となる。こうした食文化形成が大切である。この第四段階を健康追求段階、健脳運動とする段階である。つまり、長寿、健康を目指して、さまざまな食材と健康食を求める運動である。こうした地域の食文化の形成と追求を産官学連携により進める必要がある。地域の食材でゆっくり、ゆったり、健康で長寿とする地域であるとすればこれを評価するものは他地域からの来訪者によるものでツーリズムである。こうした食文化形成がグリーンツーリズムをはじめ、ス

ローツーリズムへと繋がるであろう。

本研究はスローフードからツーリズムへの移行を視点に置きつつ 第1の目的はツーリズム、とりわけ、スローツーリズムの概念を検討する事、第2は岐阜地域での観光客数を分析、検討すること、第3は外国人観光客が特別多いとされるスペインの観光戦略を事例として取り上げ、それから結論を導き出したい。方法として既存文献の整理及びスペイン旅行(2006年2月15日～25日)を通じて纏めるという方法をとっている。

2. 観光、グリーンツーリズム、エコツーリズム、スローツーリズムに関する諸見解

地域の食文化をゆっくり、じっくり評価する人々はまず、当該地域の人々であるが次にそれを評価する人々は地域交流産業としてのツーリズムがある。ツーリズムの概念を検討してみよう。

2-1. 観光 (Tourism,)

ツーリズムは従来 観光産業として位置付けていた。末松直義氏によれば、観光とは「美しい風光、珍しい風物又は歴史的遺物を観ること」といわれているがそんな単純なものではないとして詳述している。つまり、ポールマンの概念を引用し、観光とは「その目的が保養、遊覧、商用職業のいづれにせよ、あるいはその他の理由、なかんづく特殊の催物や事件に基くにせよ、定住地からただ一時的に離れるすべての旅行であって、ただ職業上の交通において職場への定期的な往復するものは除かれる」としている。²

末松氏は観光について次の七つの条件に纏めている。

① 日常の生活圏を離れる。 ② 再び、日常の生

*東京農業大学

活圏に戻る。③ 任意的な旅行で生活上の法則を受けない。④ 娯乐的知識的要素をもち、精神的満足感をもとめる。⑤ 職業上の移動は含まれない。⑥ 消費経済的行為である。⑦ 行為としては他の土地の風物、風習、自然などを鑑賞する。としている。

2-2. グリーンツーリズム、エコツーリズム、日本型 GP について

グリーンツーリズムは自然のみならず、農林漁業の体験をはじめ、地域の生活・文化に触れることや地域の人々との心のふれあいを重要としている。欧州ではグリーンツーリズムが古くから導入され、イギリスでは Rural tourism, Sustainable tourism と呼ばれ、イタリア、スペイン、オーストリーでは Agro-tourism と呼んでいる。1936年、フランスではバカンス法が制定され、週休以外に年間15日以上の有給休暇が取れるようになって始まった。1955年には、フランス民宿協会が設立されている。日本では1992年に「新しい食糧、農業、農村政策の方向」において始めてグリーンツーリズムを取り上げている。³

エコツーリズムはエコロジー(生態学)に配慮した旅行で21世紀型観光といわれるものである。これは自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し、学ぶと共に対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のあり方である。ドイツではクラインガルテン方式として都市生活者が農作物を栽培するための農園を貸すことが勧められている。大規模開発型のリゾート開発ではなく、農山村の自然や文化をありのままに生かした農家民宿などによる家族ぐるみの長期滞在型の旅行形態である。

上記 グリーンツーリズムやエコツーリズムを結合させて「日本型グリーンツーリズム(GP)」として青木辰司氏は位置付けている。同氏によれば GP とは「都市と農村の相互補完・共生による国土の均衡ある発展を基本目標とし、緑豊かな農村地域においてその自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動(農村で楽しむ、ゆとりある休暇)(GT研究会)ここでグリー

ンとは単に緑や自然と言う意味に留まらず、環境保全や社会文化の持続可能性確保の意味を含めている。またツーリズムは物見遊山的な観光でなく、様々な個性的な体験や交流を通して心身をレフレッシュする活動を意味する。⁴

日本型 GP として農林業公園型は都市近郊地域に多く、自然・文化・景観資源活用型は農山村地域に多い。さらに食文化型と生涯学習型は全域に存在する。日本型 GP と呼ばれるのは欧州と異なり、都市と農村の距離が比較的近いこと、長期休暇がとりにくい労働環境のもとで日帰りや短期滞在が多いなかで ①産直、農産物直売所、②イベント(ふるさと祭り、農林祭り)、③農業、農村体験(市民農園型)等が主流となっていることからである。

グリーンツーリズムが日本において定着しにくい要因として ①農家に受け入れる時間的余裕がない。②ヨーロッパのように農場制度でなく、集落制(Village agriculture)であるため、村落の合意が必要であるばかりでなく、宿泊施設の建設など新規投資が必要となる。③農村景観が心を癒すほど優れていると思われていない。④需要者も英国のように田園でリタイヤー生活を送るといような社会的ステイタスがないし、逆に日本では都市に出て「一旗揚げる」のが成功の証とされた歴史があるという。⑤欧州では著名な童話には森や農村が多く登場する。⑥国際アグリツーリズム学会会長 アドリアーノ・チアニ教授によればイタリアの農村でツーリズム収入が農業収入の5倍に達している事例を見ると農場の中にすっぽりツーリストが滞在し、過ごせる空間があるが日本では集落全体が合意しない限り個々の農家としては難しい。⁵かやぶき屋根家屋が魅力的だとしても建築基準法、食品衛生法、消防法にふれるなど条件が整っていない。

2-3. スローツーリズム

ここでスローツーリズムとはなにかを検討しよう。現代の旅の主流はファストツーリズムであり、目的の観光地を次々と移動し、効率的に回遊するものでパッケージツアーが基本である。

そのため、回遊観光地数の多いツアーが選択される。これに対してスローフードやスローライフへと向かう中で「ゆっくりじっくりみて歩く観光あるいは観光というより自己実現のできるDO, BEのある旅行」をスローツーリズムと呼んでいる。これは時代の変化、価値観の変化と多様化、物質的豊かさの限界、ストレス社会、環境志向、癒しへの願望などから新しい旅行形態が求められてきている。それらは健康志向、環境志向、教育志向とファストツーリズムからスローツーリズムへと変化するだろう。またマスツーリズムから個や少人数のツーリズムへの変化である。

その上でスローツーリズムの5条件を提示している。

- ① 健康志向であること。ヘルスツーリズム。歩くこと、のんびりとストレスを解消する旅、スローフードを味わうこと。
- ② 滞在型であること。
- ③ 自己実現であること。
- ④ 車の規制、スロートラフィック
- ⑤ 環境志向であること(エコツーリズム)。

このようにしてスローツーリズムはエコツーリズムやグリーンツーリズム、およびアグリツーリズムを包含したものとして位置づけられよう。スローツーリズムの中にはスローなタウンづくりが不可欠となる。

スロータウン町づくりとして次の四条件があげられる。

- ① ITの進展に伴い、人、ものの流れの変化に対応し、脱車社会
- ② 歴史や文化を大事にするソフト機能
- ③ 美しい風景、景観づくりの原則が明確化していること
- ④ 決意プロセスを重視した自立型地域運営

こうした中で岐阜市スローライフ推進委員会報告は次のように述べている。⁶『人々の価値観や生き方は多様であることを前提に20世紀の効率性や機能性一辺倒のライフスタイルを見直し、暮らしのスローな部分に光をあてることにより、地域の自然をはじめ、歴史や伝統、文化の中の個性ある岐阜市らしい、岐阜市ならではの「ほんもの」を評価し、再生させること』⁷としてい

る。

長良川地域スローツーリズムでは、従来型の1ないし2箇所をみて回るのではなく、長良川流域2市4町にまたがる部分を面でとらえるとする。

「岐阜市周辺に残された町並みを歩き、鵜飼などのほんものを感じる文化に触れ、名水百選に選ばれた長良川の水が育んだ酒を流域に点在する酒蔵で楽しみ、豆腐、うどんなどの食材の生産現場を訪ね、これらを食べる、また住民と交流を図る」としている。この考えからスロータウンの具体的な都市連携が必要となるであろう。

3. わが国及び岐阜の観光の現状と課題

岐阜県観光の現状を検討する前にわが国全体の観光の現状と特徴を検討してみよう。

第1に日本国民の海外旅行者数をみると2005年に1740万人であるが海外からの観光客数は過去最高とはいえ、673万人で前者の38.7%を占めるにすぎない。これは愛知万博などによる誘客効果が認められる。

政府は「ビジット ジャパン キャンペーン」で外客誘致を目標に掲げた結果であろう。この政策の背景には故木村尚三郎氏が唱えるように「21世紀は動の時代、国際的移動の時代」という位置づけである。国際観光連盟(ITC)によれば全世界の観光費消額は、1995年の4010億ドルから2020年に約5倍の規模になると見込み、観光産業の規模は2010年に国内総生産(GNP)の12.5%、雇用人口の10.9%となると予測している。⁸

わが国の現状は2001年に観光費消額合計は48.8兆円、雇用創出効果は393万人でそれぞれGNPの5.4%、全雇用者数の5.9%にすぎない。このうち、外国人観光客の観光費消額は約4兆円、雇用創出効果は23万人にすぎない。この観光産業規模はオーストラリア4.5%、チリ3.8%に対し日本は2.1%にすぎない。また雇用規模においても全産業に対し、オーストラリア5.4%、ニュージーランド4.1%に対しわが国は2.7%にすぎない。政府の平成16年度の観光費消額もGNPにたいして5.8%、雇用規模も全雇用人口

に対して7.3%と国際水準の10%に届いていない。

観光交流を促進するためにPR活動の活発化や出入国手続きの円滑化のほか国民に対し、休暇取得の促進、さらに魅力ある観光の展開として「グリーンツーリズム」「エコツーリズム」の推進をあげている。

「平成16年度岐阜県観光リクリエーション動態調査結果」⁹によると県内観光客数は4646万6000人でそのうち日帰り客が91%を占め、宿泊客は9%の423万人である。観光費消額は2592億円、日帰り客による収入が57.7%、宿泊客収入が42.3%である。

県内の自治体別、例えば岐阜市と高山市と比較すれば 岐阜市の入りこみ客数は8321,142人、高山市が2679,244人であった。しかし、宿泊客割合は岐阜市で10.3%、高山市で49.2%である。観光客の費消額は前者で日帰り客2000円、宿泊客23,000円、後者は8900円、31,500円としている。このようにして推計すれば岐阜市385億円、高山市536億円となる(中村論文)¹⁰。このことから日帰り型から滞在型への移行が主張されるのである。

他方、愛知県の観光の現状と戦略を見てみよう。

愛知県への外国人訪問者数は2001年に約48万人で全国の10%である。そのうち、72%はアジア人である。さらに業務目的が多く観光目的ではない。外国人観光客の行動特性は欧米人から見ると日本の歴史、文化、食事に関心が高く、アジア諸国の観光客も買い物、温泉のほか食文化への関心が高い。韓国、台湾、中国も日本の食事への関心が高くなっている。

訪日外国人旅行者の日本観光への提案は海外宣伝、言語、物価が高い、観光情報の項目である。宣伝と観光情報を入れれば42.8%に達する。もう一つの提案は観光客が周遊型の旅行形態をとるので都市連携や地域連携が大切である。名古屋市は関東と関西の通過型となっている。岐阜への外国人観光客は年間93,366人で全体の0.2%にすぎない。

日本への外国人観光客数は海外への観光客数に対して三分の一であり、GDPに占める割合も

5.4%と世界平均の二分の一である。

もとより、岐阜地域でスローフードを進める場合、伝統的な食材を見つけ出し、その運動の方向性を定めたとしても、その評価を正しく行わなければならない。その評価すなわち、地域を活性化し、社会性を高める場合にそれを評価する人々が大切となる。単に地域内の人々のみならず、近隣諸県や全国的規模の人々や海外の人々が高く評価してやってくる必要がある。

そうした場合、岐阜県の観光入り込み客数は徐々に増えてはいるとはいえ、その91%は日帰り客(デイリターンタイプ)であり、県内在住の観光客が47%をしめ、愛知及び三重など近県在住者が41%を占めている。すなわち、岐阜県を含む東海地域から、観光客が集まり、その87.8%とほぼ日帰り客数を構成している。そして全国的規模での観光客は12%であり、外国人は0.3%にすぎないのである。この場合、地域内の人々をIクラス、近隣諸県をIIクラス、全国からの人々をIIIクラス、海外諸国からの人々をIVクラスとしよう。岐阜県の場合、このIクラスが47%、IIクラスが41%を占め、いわゆる東海圏域(1.2タイプ)が88%を占め、東京・大阪からは12%、海外からは0.3%にすぎない。こうした状況は入りこみ観光客が日帰り型観光客が91%を占めることから明らかである

地元産の優れた食材と食文化に対して、それを文化として正しく評価するものとしてグリーンツーリズムをあげる人々が多い。

けれども観光は従来型の物見遊山的な観光(サイトシーイング)または通過型の観光でなく、何日も滞在し、参加するいわゆる体験型、参加型、滞在型の観光でなくてはならない。¹¹観光はサイトシーイング型の観光から、滞在型バカンス型の観光への変化を説くのはイタリア・ペルーシア大学のアドリアーノ・チアニ教授である。チアニ教授は国際アグリツーリズム学会の会長を務めている。その理論から見ても岐阜県の観光はサイトシーイング型で日帰り型に過ぎなくスローフード運動を発展させるものとはいえない。

4. 従来の観光事業への批判

我が国は観光立国を宣言して久しいがどの自治体も成功しているとはいえない。その原因について見てみよう。

観光振興のためバブル期に制定されたリゾート法（総合保養地域整備法（1987））により内需拡大策を試みたがいずれも大失敗に終わっている。

これは地域開発を「箱もの」の建設、施設整備に重点をおいたが、むしろ地域の伝統や文化の見直し、自然環境の保護を重視すべきであった。またこうしたリゾート開発が国内観光客を目当てになされ、外国人観光客の誘致を目指すものではなかった。もし県外各地の観光客誘致が一定の評価をうるならば海外からも注目されよう。

また事実上温泉とテーマパークが中心であり、地域づくり、国づくりの観点が希薄であった。既存地域でなく、地価の安い所に巨大施設を建造するだけのもので日本人の心から離れてしまうものが多かった。国内にヨーロッパの国々スペイン、オランダ、デンマークなどを作って安上がりの観光を目指したが外国人は言うに及ばず日本人の心をもとらえていない。むしろ国民は本物を求め、国外に流出している。昨年の海外観光客数は1800万におよんでいる。

さらに巨大開発とテーマパークは北にアルファリゾート・トマム（1998）から南はシーガイア（2001）まで破綻するリゾート事業が相次いだ。開発による環境破壊も深刻であった。箱もの享楽施設の建設・整備を中心とした観光は持続的な集客にもまた安定的な地域発展にも繋がらなかった。「伝統文化を見直し、環境保護に重点をおいた住民に親しまれる開発でなければならない。それによって国内ばかりでなく、海外観光客の誘致に繋がるのである。」

観光は本来、物見遊山型の見物旅行から滞在型・参加型また文化交流型の観光に移行しているにもかかわらず、日本での観光が国内の見て歩きから海外への見て歩きに移行しているにすぎない。欧米ではホッピングツアーと呼ばれているものである。またショッピングツアーでもある。通訳ガイドの掲げる旗の下に一団がトラ

ック片手に通過する。殆ど外国語を話さなくても一団に加われば日本語のみで欧州旅行が可能である。一種の団体旅行型、修学旅行型の観光で観光地を見て回る型となっている。ショッピングも日本語で日本人の店で購入する事が多い。パック旅行から見れば全体がバスである、便利である。経済的効率的に世界を旅行するには利点が多い。けれども、我が国の旅行改善や交通改善の必要性は感じられない。例えば日本における標識に外国語を併記する。ホテルのほか、民宿などの格安な宿泊施設、および、観光ガイドブックの外国語版を多くするなど。以上のように巨大リゾート、テーマパーク中心型の箱もの投資型、物見遊山型なのに対してスペイン観光はどのようなものか検討してみよう。

5. スペインの観光戦略

スペインの観光戦略はどのようなものであるか前に述べたように5400万人、GNPの12%を占めるがどのようなことを行っているか

- 1) テーマの設定：「太陽と浜辺」というテーマのもとにヨーロッパ（特にイギリス、ドイツ及び北欧）のバカンス需要に対する受け皿として出発した。¹²
- 2) 国外に31の観光事務所を設置、ヨーロッパのなかのフロリダ的役割をもたせている。競争相手国であるモロッコ、チュニジア、トルコ、ギリシャなどの地中海沿岸諸国（自然観光）の低価格に対してスペインは歴史と文化に基づき、サービスの質の向上を目指している。北ヨーロッパのプロテスタントに対してカソリックとしてマリア信仰として名高い。フランシスコ・ザビエルはインド、日本などへの布教活動をしたがマリアさまの描写は著名な夫人や恋人が描かれたりする。したがって各国、各民族の理想の女性が描かれており中米や南米や黒人のマリア様であってよい。またキリスト教文化ばかりでなくイスラム文化圏（アラブ諸国）の人々をひきつけているという宗教的特長を備えている。かつてグラナダもセビリアもイスラムの支配下にあり、その伝統

的文化が脈々と流れている。そのため、イスラム圏の人々が訪れるのである。

- 3) 自治体では官民一体的取組み…例えばマドリッド州では商工会議所で年間30回世界各国に誘致団を派遣している。アンダルシア州で観光客は2100万人で宿泊客は760万人。歴史と文化とくにオペラ(カルメン、ドンファンなど)やフラメンコなどの芸術文化を世界にうりだし、歴史的建造物を劇場として使用する。日本で言えばアイヌ民族とアイヌ踊りや沖縄のメロデイを海外に発信することである。フラメンコはスペイン南部のジプシーの踊りである。これは国内の異文化として日本の沖縄や九州での民族舞踊や朝鮮通信使の地域が取り上げられてよい。また民族の観点から見ればアイヌ文化がもっと紹介され、カナダ、米国西海岸、メキシコ、中米、ペルー、チリ—一まで広げてその民族的伝統的差異や共通性が検討分析されてよいだろう。

4) 自治体連携…セビリア、コルトバ、グラナダなどの都市が連携してパック旅行を組んでいる。岐阜で言えば鶯飼と郡上踊り、白川の世界遺産との連携である。グラナダでトルコの観光客の一団が訪れ、大変氣勢をあげていたがかつてのアラブ民族はここを支配していたと懐かしく飲み、踊っていたのかもしれない。

グラナダにきたるトルコの旅行者

かつてわが世はここにありしか

- 5) 省庁連携…観光とスポーツ サッカーではベッカムをいれ、市長が英国国民に向けてテレビで訴える。ニューヨークジャイアンツに松井選手が入団・記者会見した時、市長ブルームバーグ氏が特別参加し、紹介した。日本でも開催都市は大相撲で朝昇龍、曙、琴欧州が昇進した時モンゴル、ハワイ、ブルガリアやEUなどにもっと宣伝すべきであろう。
- 6) 文化・音楽の独自性のアピール…フラメンコと闘牛セビリアはフラメンコ「フラメ

ンコのニューオーリンズ」をジャズのニューオーリンズにたとえている。闘牛は独特のスペイン文化である。これには賛否両論があるろう。わが国での捕鯨の文化に対する取り組みと対比されるものである。

- 7) リピーターを増やす…スペイン観光の90%は欧州人でその50%はリピーター客である。アンダルシア州の観光客の60%はリピーター客でもう一度訪れたいというように市民のホスピタリティがある。日本においても温泉はリピーター客を増やす。
- 8) 歴史と文化…世界遺産はスペインにおいて37(2003年)を数えている。世界遺産は129カ国754のうち37で最多である。
- 9) ニーズに応じたメニューをつくり、スポーツ、歴史と文化、建築及び宗教(教会)が連携する。
- 10) 観光統計の整備 各地域、各部門の観光客数が毎月毎日集計され報告・発表される。日本では断片的、部分的で海外への宣伝は出来ていない。
- 11) 読みやすい表示や案内版を作る事、さらにすべてわかりやすくストーリー化する。表現を文学、童話、音楽でわかりやすく表現している。そのいくつかを例示しよう。セコピアの城はウオルト・ディズニーがロケした白雪姫として
 グラナダはダマスカスと対比
 コルトバはトルコのイスタンブール
 闘牛とヘミングウェイ、絵画のピカソ、ベラスケス、グレコなどである。
 政治ではフランコ独裁政権の評価
 コロンブス 食におけるコロンブスの役割²
 ワシントン・アービングの「アルハンブラ物語」により売り出す。
 ヘミングウェイの闘牛支持、ピカソの闘牛支持を全面に出す。
 セルバンチイスの「ドンキホーテ」
 建築も同様、とくにガウディの建築が有名である。
- 12) 1人二役社会となっている。…個人の仕事のみならずもう一つの仕事として観光・ホ

スピタリテイに力を入れる。人口減少社会での役割としている。

- 13) 三大宗教(キリスト教、イスラム、ユダヤ)の町という特性を備えている。
- 14) 食の多様性 魚食の多様性・スペインの漁船の総トン数はイギリス、フランス、ドイツ、デンマーク、オランダ、ベルギーの総合計トン数より多い漁業国である。茹でたこ、イカ、エビなど、パエリア、フライドチキン、子豚の丸焼き、オリーブオイル、ワイン、生ハム
- 15) 土産・・・革製品、象嵌細工、寄木細工、ワイン、オリーブ等
- 16) 安全性・・・犯罪の最小化 スペインはイタリアと共に犯罪多発地とされているが実際はどうであろうか 1月18日の新聞によれば2005年、住民1000人当たりの犯罪数は49.6件でEUのなかで低い。英国 105.4人、ベルギー 94.4人、ドイツ 80.4人、フランス 63.9人、EU平均は70人。死亡数(殺人)は03年1366人、04年は1279人、05年は1233人と毎年減少傾向である。
- 17) アルカンタラ風 ウズラ料理のルーツ スペインでは女子修道院の菓子づくり、男子修道院のワイン、リキュールづくりが盛んである。また日本で取り入れられているカステラは本来スペインのカステイリア地方からのものである。フランス料理書にスペインの優れたうづら料理があると記載されている。それはペルデイス(山うづら)の料理であるが日本うづら(コドルニス)とは異なっている。
- 18) スペインの農業、野菜をふんだんに取り入れたスペイン料理をもたらすスペイン農業とはどのようなものか 南からオリーブ、ブドウ、そしてどんぐり(ハム製造用)牧場が見られる。オリーブ、ワインの輸出量は世界一である。
国土のうち、農用地は59.7%、耕地は3,000万ha、草地は1100万ha(40%)である。しかし、農地の50%はラデイフンデイオとよばれる大規模農家が所有している。5ha未満の小経営は全農家の58%である。

6. 結び

スローフード運動の目指すところにスローツーリズムが展望される。スローツーリズムは従来の観光の概念すなわち物見遊山の多くの観光地数を駆け巡るパッケージツアーでなく、ゆっくり、ゆったり、ゆたかに過ごす旅行である。我が国は外国人旅行者に対する観光収入は5.4%と国際平均の半分であり、政府はビジットジャパン計画で2010年に1000万人を目標としている。その中でグリーンツーリズム、エコツーリズムも含まれている。また日本型ツーリズムとして日帰り型や朝市など農産物直売所、イベント型として位置づけたとしてもGNPの10%に達するものではない。これらを総括してスローツーリズムを提示した。その上で日本及び岐阜県における観光客数を検討し、その対極にあるスペインの観光戦略を取り上げている。スペインの観光客数は日本の10倍、GNPの12.5%と多いばかりでなく、その要因としての観光戦略は自治体、都市間、省庁間連携、世界に誇る歴史と文化とくに食文化を基軸に組み立て、世界へ情報発信に努めている。そして文学、芸術もそれを支援し、相互に文化力を高めている。この取り組みは大いに参考とされるものである。

参考文献

- 1) 木村尚三郎：ヨーロッパからの発想 講談社 1979
- 2) 出井弘一：カステラの道 学芸書林 1987
- 3) 中山 瞭：スペイン街道物語 JTB 2002
- 4) 額賀 信：観光革命 - スペインに学ぶ 日刊工業 2004
- 5) 中丸 明：スペイン5つの旅 文芸春秋 2,000
- 6) ギャリー・マーヴィン：闘牛・スペイン文化の華 平凡社 1990
- 7) 佐伯康英：闘牛士エル・コルドベス 1969年の叛乱 集英社 1981
- 8) ミシェル・エリス：闘牛鑑

現代思潮社 1976

- 9) 渡辺万理：修道院のうづら料理—スペイン料理7つの謎 現代書館 2002
- 10) 中丸 明：絵画で見るグレコのスペイン新潮社 1999
- 11) エリック・バテラ：闘牛への招待 白水社 1998
- 12) 佐伯康英：闘牛 平凡社 1976
- 13) ワシントン・アービング：アルハンブラ物語(上下) 岩波 1997
- 14) ヘミングウェイ全集：日はまた昇るほか
- 15) ドリュウ・ローネイ：スペイン人のまっかなホント マクシミリアンページハウス1999
- 15) スペイン観光局：スペイン、マドリッド、トレド、アンダルシア、セヴィリア、コルトバ、グラナダ
- 16) 大野功二郎・杉山道雄ほか「白川村におけるグリーンツーリズムの研究」岐阜大農研報 63, 97-104.1998
- 17) 中部の観光を考える百人委員会『中部の観光を考える』交通新聞社.1-180.2001.
- 18) 道下弘紀『ヨーロッパ田園と農場の旅—グリーンツーリズムへの招待』東京書籍、1998.
- 19) 多方一成『スローライフ、スローフードとグリーンツーリズム』東海大学出版会1-143、2006. 4
- 20) 須田 寛 観光の新分野 産業観光—産業中枢「中京圏」からの提案 交通新聞社1-251、2002
- 21) 野々山真輝帆『スペインを知るための60章』明石書店 2004年3月

引用文献

- 1) 杉山道雄 岐阜地域におけるスローライフに関する研究 岐阜市立女子短期大学 2005、3 1～157 ページ
- 2) 末松直義 観光論入門 法律文化社 1978.41-126
- 3) 農林水産省 新しい食糧、農業、農村政策の方向
- 4) 青木辰司 日本型グリーンツーリズム
- 5) Adrrriano Ciani: Economic Study of Agro-tuorism in Umbria, Italy 2003.
- 6) 岐阜市スローフード推進委員会
- 7) 細江茂光 スローフードが似合う街 岐阜市「美しい街づくり—日本」シンポジウム、平成15年5月20日 ぎふ街通信特集「スローライフのすすめ」VoL21.2003. Slow & Quick Vol. 1 and 2. 2004, 2005.
- 8) 観光白書
- 9) 岐阜県観光リクリエーション動態調査結果 15年度、16年度、
- 10) 中村康恵 都市観光の比較研究—岐阜・高山と伊勢志摩の比較考察 岐阜市立女子短期大学卒業論文 平成14年 3月 1～25
- 11) 杉山道雄 恵那地域の観光農業の現状と課題東海農政局 1988.3.1～51
- 12) 額賀 信 観光革命—スペインに学ぶ 日刊工業 2004.
- 13) .アレッサンドロ・ボナンノ著 上野重義・杉山道雄共訳『農業と食糧のグローバル化—コロンブスからコナグラへ』筑波書房 2001年

—食物栄養学科—